



INTERNATIONAL
ICE HOCKEY
FEDERATION

IIHF Referee 4men system

はじめに



トップレベルのアイスホッケーにおいてレフェリー2人、ラインズマン2人制を導入することは氷上のゲームオフィシャルにとって技術の向上とジャッジの基準について学ぶために良い方法である。このシステム導入にあたって、レフェリーは以下の基本的事項について周知しておく必要がある。

1. 試合中、常に首尾一貫性を保つこと
2. 2人のレフェリーが反則を科すことについて争うべきではない。
3. 2人のレフェリーの試合をコントロールする責任は同等である。よって抗議や試合の混乱を恐れるあまり、反則をコールする際にためらわないこと。

審判団4人制の目的は、ルール違反とみなされる行為を確実にペナルティと判断するためにある。これは現行の審判団3人制の理念と同じである。

IIHF世界選手権において審判団4人制で試合を行う場合は、どちらか片方のレフェリーが上級者ということではなく、2人レフェリーは同等の立場である。反則のコール、ビデオによるプレイの確認、選手やコーチへの対応、必要に応じて試合中断の判断など両方のレフェリーは同じ責任を負う。

用語



- このシステムの名称は「審判団4人制」
- フロント もしくは リードレフェリー = アクションエリアにおける判定
- バック もしくは トレイリングレフェリー = アクションエリア外における判定
- アクションエリア=バックがある領域

1. 基本的なレフェリーのポジション

1-1 ピリオド開始時のオープニングフェースオフ

- レフェリー1はオフィシャルボックスに向かってパックを落とす。その際レフェリー2はプレイヤーズベンチに向かってオフィシャルボックス側に立つ。(図1 参照)
- どちらのレフェリーが試合開始時、および第2、第3ピリオド、延長戦の開始時にフェイスオフを行うかはレフェリー間で決めること。

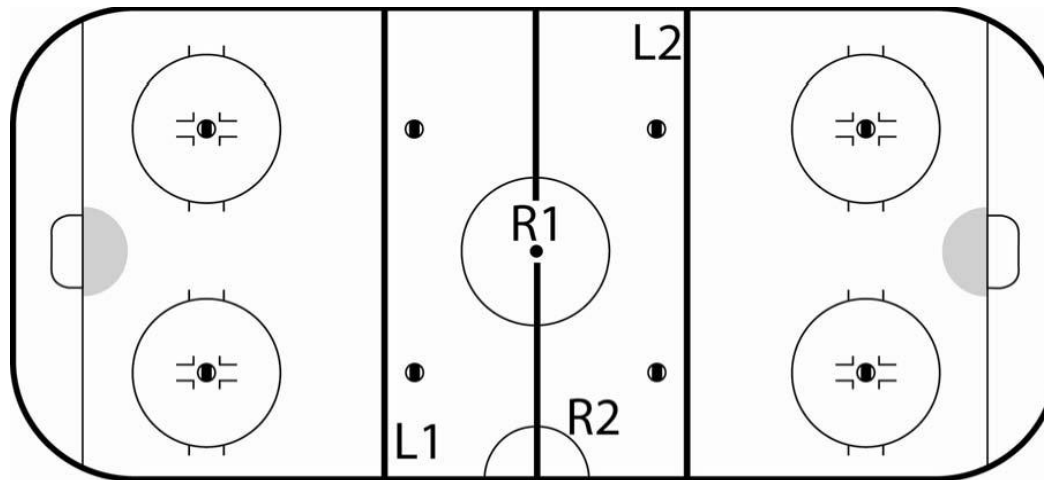


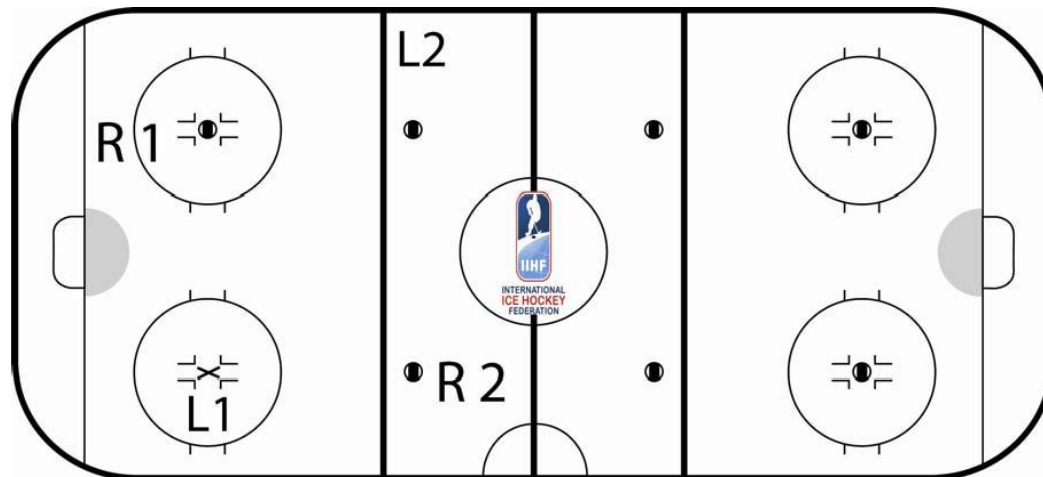
Figure 1

1-2 得点後のセンターアイスでのフェイスオフ

- ゴールを確認したレフェリーはオフィシャルボックス前に位置し、もう一人のレフェリーがセンターアイスでパックを撒く。

1-3 エンドゾーンでのフェイスオフ

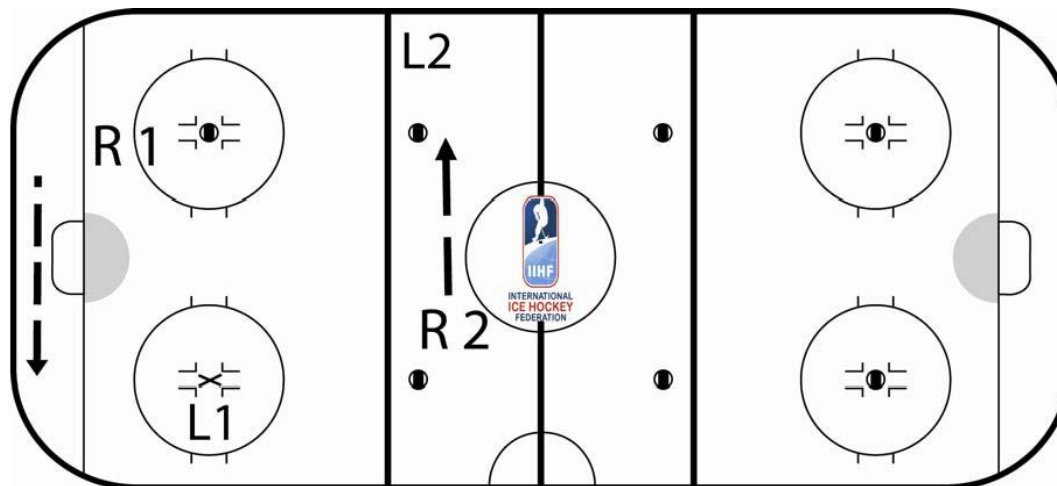
- エンドゾーンでのフェイスオフの際は、レフェリーは互いに向かい合う場所、対角線上に位置し、
- リードレフェリー(R1)は3人制と同様にゴールライン沿い、または近辺に位置する。
- その際、トレイリングレフェリー(R2)は、センターラインとブルーラインの中間地点、リードレフェリー(R1)に対しての対角線にあたる位置に移動し、どの方向へも移動できる体勢でいること。
- 試合の流れをしっかりと確認できる位置にすること。一番近いブルーラインをカバーするラインズマンの動きをはっきりと見える位置にすること。(図2参照)



X = puck

Figure 2

- リードレフェリー(R1)がエンドゾーンフェイスオフの際に、氷上の反対側に移動しなければならない場合は、トレイリングレフェリー(R2)もフェイスオフの前に速やかに反対側へ移動しなければならない(図3参照)



X = puck

Figure 3

- 注: パックを撒くラインズマンの背後にいるフォワードの選手が不適切なポジションで構えているような場合は、バックラインズマンはOPM (IIHF Officials Procedures Manual) に示されていることに従いその旨を知らせること。センターフォワードの選手を交代させることでこういった違反行為の問題は解決されることが多い。トレイリングレフェリーは必要だと判断した場合にはエンドゾーンフェイスオフサークル内の選手のところへ行き、選手に警告を与えニュートラルゾーンまで戻る。
- エンドゾーンフェイスオフバイオレーションで、センターの選手を交代させる場合、フェイスオフを行うラインズマンは両方のレフェリーが正しい位置にいることを確認しなければならない。
- エンドゾーンでペナルティ以外の理由で試合が止まる場合、エンドゾーンに移動するラインズマンはどちらのフェイスオフスポットでフェイスオフをするのかを示すこと。

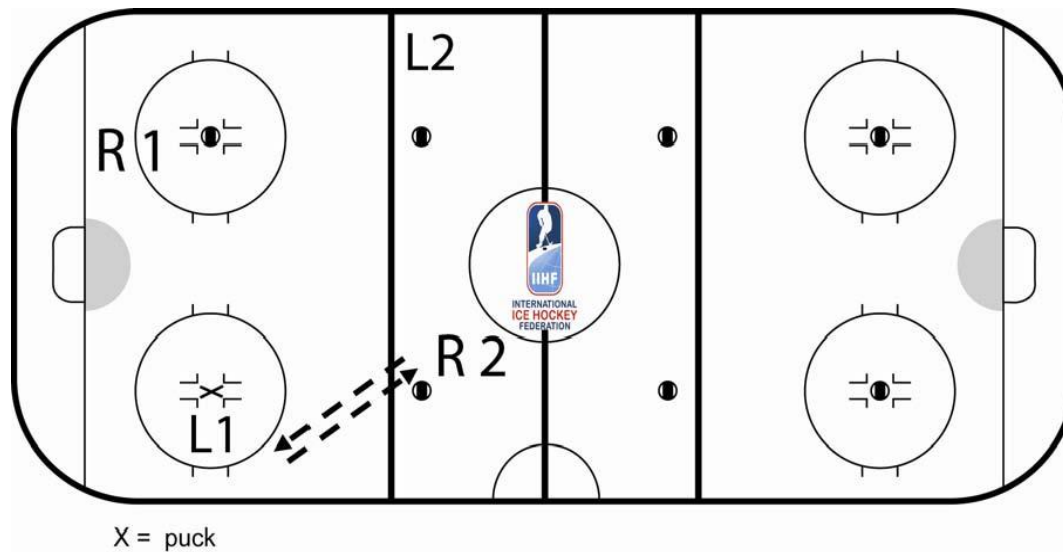


Figure 4

1-4 ニュートラルゾーンでのフェイスオフ

- ニュートラルゾーンでのフェイスオフでは、2人のレフェリーは対角線上にそれぞれ位置すること。
- 通常、レフェリーは2人とも試合が止まる前にその位置にいる。
- レフェリー1 (R1) は、3人制と同様にエンドゾーンのフェイスオフサークルのすぐ外側、フェイスオフが行われるスポットの対角線上の位置に立ち、レフェリー2 (R2) は反対側のブルーラインの側、フェイスオフが行われるスポットと同じ線上、もう一方のブルーラインの側の位置に立ち、
- 使われないと予想される場所を見極め、なおかつフェイスオフ後のゲームが展開される場所へ移動できるように構えておく。これらの位置にいれば、どちらのレフェリーもパックがエンドまで流れた場合に、どちらかのエンドゾーンの深い位置にいることができる。(図5参照)

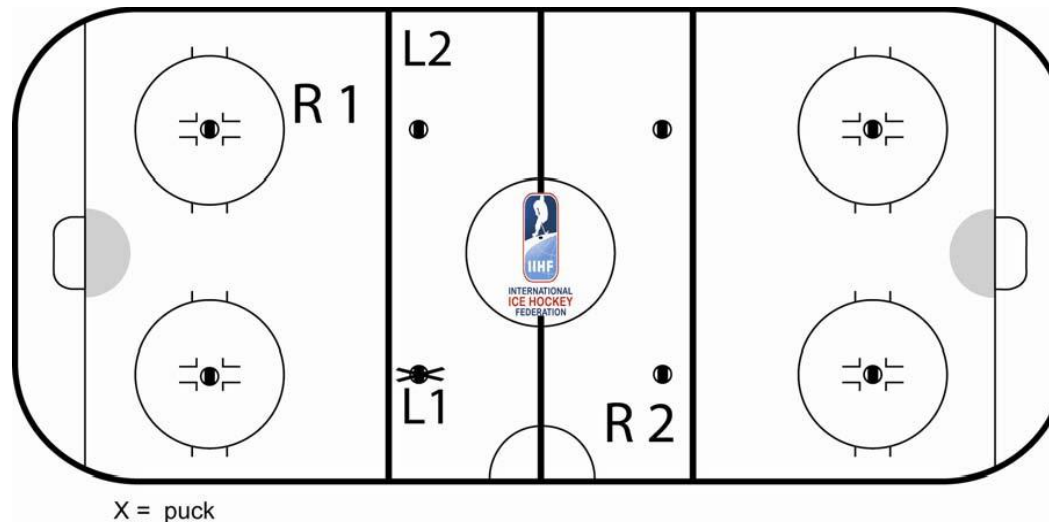
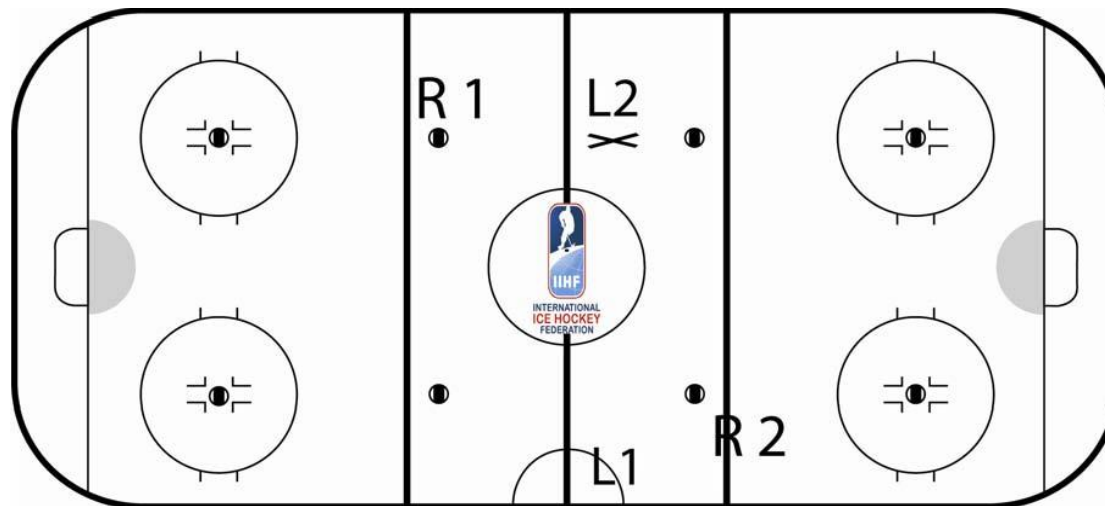


Figure 5

- センターのレッドライン近くでフェイスオフが行われる時、2人のレフェリーはそれぞれニュートラルゾーンに対角線上に向かい合ってブルーラインの側に位置する。この位置にいることにより、パックが流れる方向のエンドにすばやく移動することが出来る。(図6参照)



X = puck

Figure 6

- 注: フェイスオフを行うラインズマン(L2)の背後のフォワードの選手が互いに近づきすぎたり、正しい位置で構えておらずラインズマンにとって困難な状況のとき、どうしても必要だと判断された場合(L2)の側にいるレフェリー(R1)が選手に近づき忠告を与え、本来の自分の位置に戻る。同様の事が(R2)の側で起こった場合も(R2)はこの方法に従って試合を進行させる。(図7)

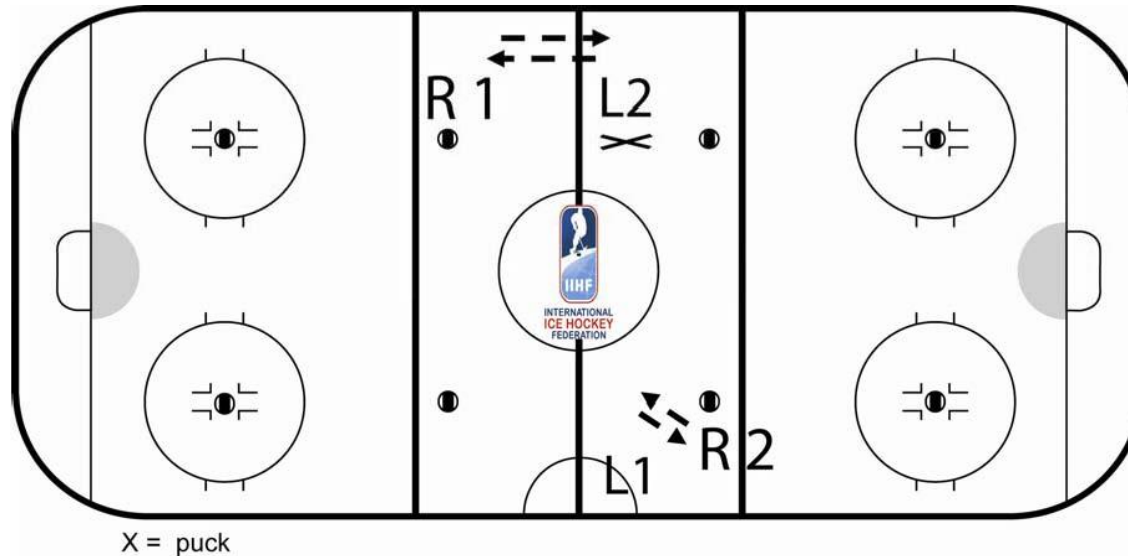


Figure 7

2 試合進行中のレフェリーの位置

2—1 センターフェイスオフ後、どちらのレフェリーがエンドゾーンの“深い”位置で試合を裁くのか？

- フェイスオフを行わないレフェリーが、パックの流れる方のエンドゾーンを担当し、リードレフェリーとしてそこで展開される試合の裁定を行い、フェイスオフを担当したレフェリーはトレイリングレフェリーとしての位置を保つ。エンドゾーンを担当するレフェリーは出来る限り素早く移動しなければならない。

2—2 レフェリーの位置・・・エンドゾーンにおいて

- 図7におけるレフェリー(R1 リードレフェリー)が上述したようにエンドゾーンの深い位置まで行くとする。このレフェリーのエンドゾーンにおける位置は、3人制と同様にOPM(Official procedure manual)に示されたことに従う。

- ☐ 必要時にはネットの側に立つ
- ☐ 試合の先を読み、選手から離れた位置にいるようにする。
- ☐ 自分の視界に入る選手やパックから目を離さないようにする。

- レフェリー2 (R2. トレイリングレフェリー) はブルーラインの外側、フェイスオフスポット辺りの位置まで 移動し、まず、パック保持者から離れた位置の選手や、自分の方向に走ってくる選手など注意を払う。R2は、近くのブルーラインを担当するラインズマンの視界の邪魔にならないように注意する。(図8)

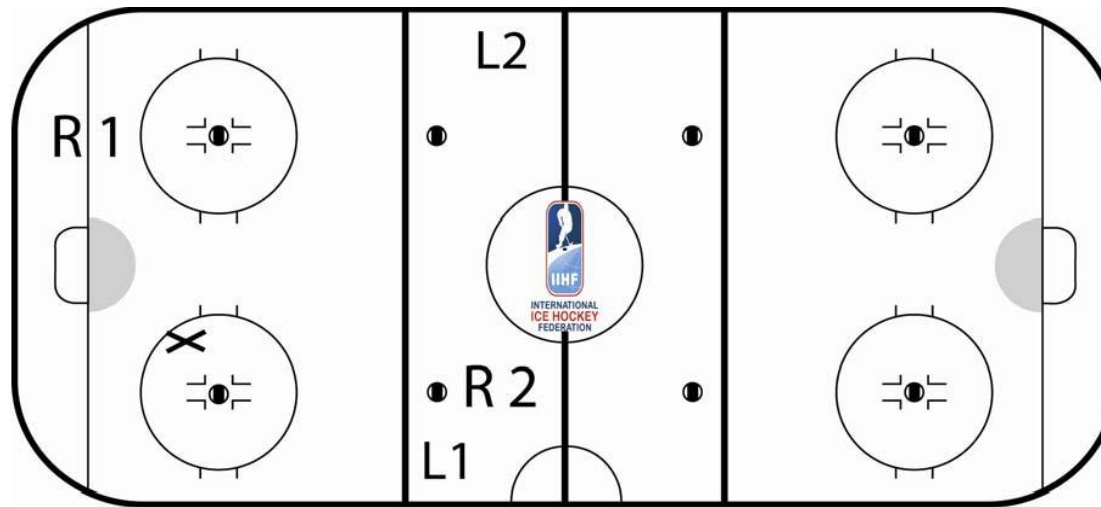


Figure 8

R1 = Lead Referee
 R2 = Trailing Referee
 L1 = Front Linesman
 L2 = Back Linesman

X = puck

- リードレフェリー(R1)がエンドゾーン内で位置を移動する場合、試合が展開されているエリア付近の状況を第一優先に考えること。選手の行動、選手やパックの位置がよりよく見える位置や角度にいるようにし、必要に応じてエンドゾーン内の自分の位置を適切なところへ移動させること。
- 트레이ングレフェリー(R2)は、レッドラインとブルーラインの中間地点に位置する。必要に応じて、左右や前後に移動し、エンドゾーンにいるリードレフェリー(R1)と対角線上の位置関係になるようにする。リードレフェリーがネット裏を横切ったら、自分も反対側へ移動できるように構えておく。また、試合の状況や見える角度などが最良にするために、ブルーライン近くまで移動することも出来る。
- エンドゾーンのリードレフェリーは、試合をコントロールするためにネット裏を横切って移動してもよい。
- ニュートラルゾーンのトレーングレフェリーが、エンドゾーンのリードレフェリーに合わせて自分の位置を移動させることは、自分自身の責任において判断して行うこと。試合の進行がしっかりと見える位置にいることが求められる。
- リードレフェリーがサイドを変える事は、トレーングレフェリーがサイドを変える機会がない限りできない。試合が進行しているときに、リードレフェリーとトレーングレフェリーがそれぞれのサイドを変えることはできない。
- エンドゾーンの内側で試合が展開しているときに、攻撃側の選手が一名、センターアイス付近に帯氷していたら、バックラインズマンと同様に、選手と同じ線上位の位置まで移動する。ラインズマンはブルーラインを担当し、トレーングレフェリーは、選手とぶつからないように注意を払いながら、エンドゾーンの深い位置まで移動できるように構えておく。
- リードレフェリーはエンドゾーンでのポジショニングを保ちネットに近い位置にいる。

2—3 レフェリーの位置・・・片方のエンドからもう片方のエンドへと試合が移動する場合

- 守備側のチームパックコントロールが移行したらすぐに、ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリーは**バックスケATING**でエンドゾーンまで移動できるように構える。これは、試合の進行を見逃さないようにするためと、ラインズマンの視界を妨げないようにするためである。
- トレイリングレフェリーがリードレフェリーの役割へと交代するときに必要なことは、パックや パック保持選手と同じライン上で移動することや遅れて移動してはいけない、ということである。試合の進行よりも速くエンドゾーンに移動しなければならない。
- リードレフェリーはパックよりも先に、ブルーラインを越えて、ブルーライン上のラインズマンの視界をさえぎらないようにする。
- 注： 状況によっては、リードレフェリーが選手と交錯することのないようなら、そのまま試合を
- 先導してエンドゾーンまで移動することもあり得る。(ただし、選手とぶつからないように気を配るあまり、試合をコントロールできなくならないように)もしリードレフェリーが、すでにブルーラインの近くか内側にいるのなら、ネットまで素早く移動することが可能である。また、試合にそのまま集中し、試合を最適な角度から見ることができる。
- トレーニングレフェリーと役割を交代するエンドゾーンのリードレフェリー(R1)は、試合の流れを追い、後方に位置し、最後尾のアタッキングプレイヤーを確認し、片方のエンドゾーンで展開される試合をよく見る。(図9)

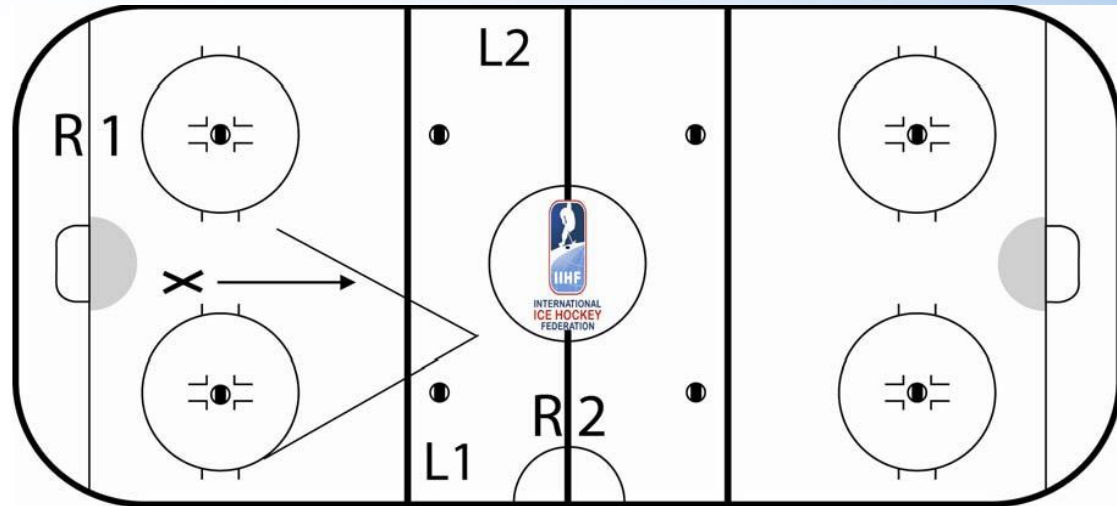


Figure 9

R1 = Lead Referee
R2 = Trailing Referee
L1 = Front Linesman
L2 = Back Linesman

→ = Movement of puck
X = Puck

- トレイリングレフェリーは、エンドゾーンを離れるときには、自分の後ろに選手が誰もいないことを確認すること。
- 注： トレイリングレフェリーは、リードレフェリーがパックや選手を避けることが難しい状況に置かれていたら、エンドゾーンに向かう選手の動きにより注意を払うこと。より早く試合を的確に見ることの出来る角度や位置に、選手の動きに気を配りながら移動することが求められる。
- リードレフェリーへと役割を交代するトレイリングレフェリーは、エンドゾーンのレフェリーの
- 反対側の氷上へと位置を変えていく。ただし、トレイリングレフェリーは、試合の展開がよく見えるようにニュートラルゾーンの中心線にそってスケーティングし、なおかつ、パックの方向や試合の展開が変化したり、守備側のチームにパックが移り自分たちのゾーンから移動することなどに 備えてニュートラルゾーンの端にも移動できるように構えておく。

- 注: (リードレフェリーの)エンドゾーンにおけるこのポジショニングは, 選手の走行の状況やパックの流れる方向によって変化をする。レフェリーは, 氷上の対角線上の位置へと流れていくパックに特別の注意を払い, 正しい判断力とパックの流れを予想することが求められる。
トレイリングレフェリーも位置を修正することが考えられる。試合がゾーンの外側で展開される時は, その時のトレイリングレフェリーは本来の位置に戻り, リードレフェリーは, トレイリングレフェリーが位置を変えようとする時, ニュートラルゾーンに流れていく際にもパックに集中しなければならない。
- ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリー(R2)は, ブルーライン付近のミッドアイス辺りに位置し, 常に小さな範囲で動き, 黙って止まっていることのないようにする。(図10)

注: ミッドアイスとは, ニュートラルゾーンフェイスオフスポットとブルーライン近くの間の空間のことを言う。

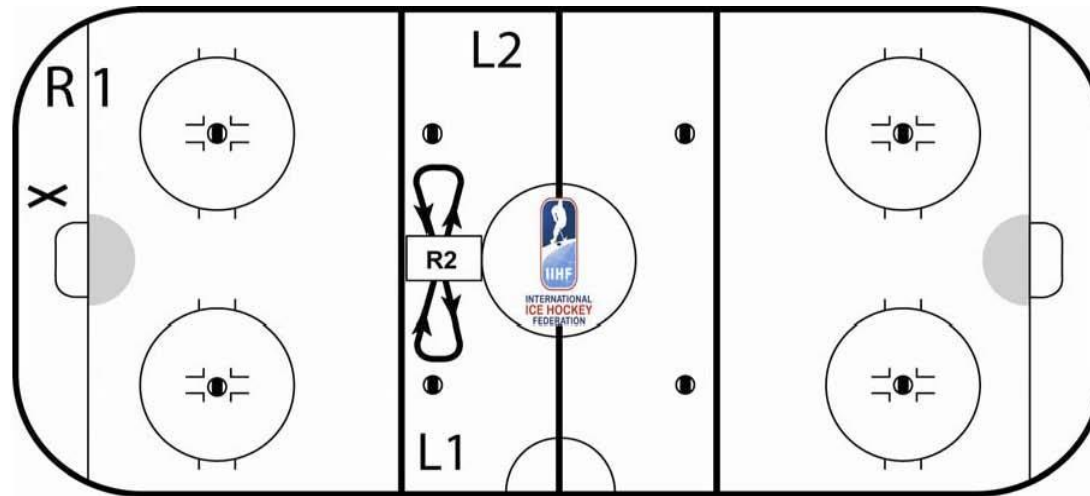


Figure 10

R1 = Lead Referee R2 = Trailing Referee X = Puck location

- トレイリングレフェリーの(R2)のこのような位置からは、自分の前方で展開する試合のパックや選手たちの移動に対して、リンクのどちら側にも移動が可能である。
- また、トレイリングレフェリー(R2)がアクションエリアから離れる時にも、トレイリングレフェリーからリードレフェリーへと役割を移行する際に試合の展開を予想する柔軟性を持たせることができる。(図11)

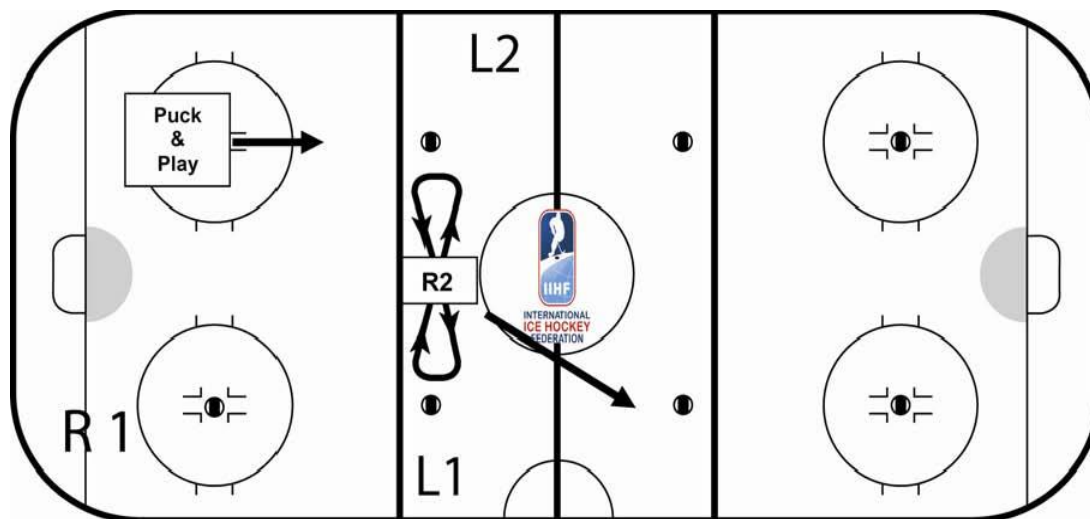


Figure 11

R1 = Lead Referee
R2 = Trailing Referee



- そうすると、今度エンドゾーンにいたリードレフェリー(R1)が自分の位置を修正する必要があるため、ネット裏を通り過ぎてR2の反対側になる位置へ移動するか(図12)そばのブルーラインへ向かってスケーティングし、R2の対角線上の位置になるミッドアイスから離れた位置へと移動する(図13)

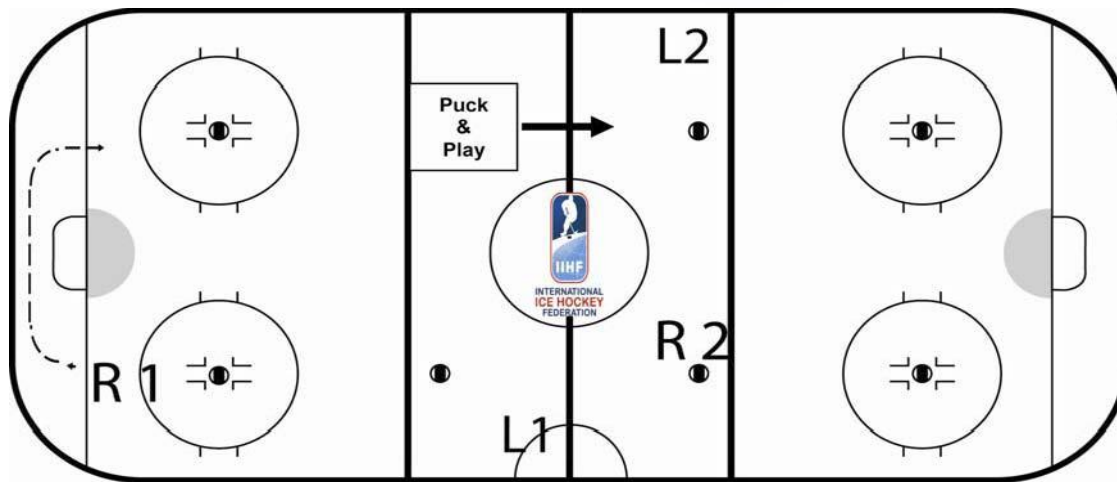


Figure 12

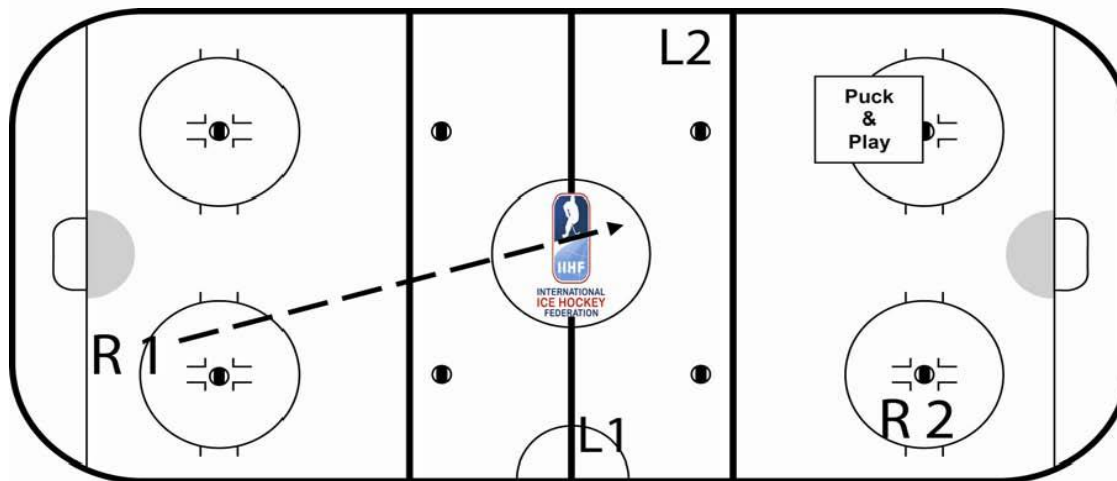


Figure 13

R1 = Lead Referee
R2 = Trailing Referee

- エンドゾーンまで試合が打ち込まれても激しいフォアチェックが行われていないなら、リードレフェリーがエンドゾーンの深い位置まで急いでいく必要はない。これは、トレイリングレフェリーが自分の担当しているエンドゾーンから移動していく際に、ニュートラルゾーンには審判が誰もいない状態になるかもしれない。もし、違反行為がニュートラルゾーンで起こりそうなとき、正しい裁定を下すことができるレフェリーがその場にいない、的確な角度から試合を見ることができる審判がその場にいないということも考えられる。
- もしも片方のレフェリーが(リード)「転んだり、追い込まれたり」してアクションエリアをカバーすることができない場合、もう一人のレフェリー(トレイリング)がエンドゾーンにおける自分の役割を果たしつつリードレフェリーをカバーし、片方のレフェリー(リード)はトレイリングレフェリーとしてのポジションに立つ。
- ニュートラルゾーンのレフェリー(R2)は、試合が進行しているときのプレイヤーの交代に注意を払うこと。もし(R2)がベンチ側にいるときは、自分の目の前をプレイヤーが出入りするようには後退した所に位置すること。

2-4 レフェリーの位置—アイシング

- パックがレッドラインから打たれてアイシングになった時、ニュートラルゾーンのレフェリーは後ろ向きにスケートしてエンドゾーンまで行き、ラインズマンによって試合が止められるまでそこで自分の位置をしっかりと確認すること。
- ラインズマンがアイシングのために試合を止めたら、そのエンドゾーンにいるリードレフェリーは(選手をさばくことに問題がなければ)フェイスオフが行われるもう片方のエンドゾーンまで素早く移動し、エンドゾーンフェイスオフに対して的確な位置に立つこと。
- ラインズマンは、フェイスオフの場所を指し示すこと。
- リードレフェリーがフェイスオフのためにエンドゾーンまで下がる時は、後ろ向きにスケーすること。こうすることによって全ての選手をしっかりと見ることが出来る。
同時に、トレイリングレフェリー(パックが打たれた側のエンドにいる)は試合の流れ、試合の中断にしたがってニュートラルゾーンまで移動し、選手の交代をコントロールすること。リンク中央から離れ、ベンチの方を向いて、IIHFの選手交代の規定にしたがって選手を交代させること
- 選手の交代をコントロールするトレイリングレフェリーは、パックを回収したラインズマンがブルーラインを越えるまで待ち、それからビジターチームの選手交代の時間を数え始めること。
- ラインズマンがフェイスオフスポットについたら、トレイリングレフェリーは3, 4秒の時間をラインズマンに与え、レフェリーがホームチームに向けて手を下ろす前にフェイスオフサークルや背後の選手をコントロールさせること。これで、ラインズマンが正しくフェイスオフを行うために5秒間ほどの余裕を与えることができる。ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリーは、選手の交代が完了した後の自分のポジションをしっかりと確定すること。

3 レフェリーの位置—国歌演奏

- レフェリー2名はオフィシャルボックス前のレフェリークリーズの位置に立つ。 ラインズマンは、レフェリークリーズの外側、レフェリーの左右横にそれぞれ立つ。

2. ペナルティガイドラインと基準

1 レフェリーの領域と責任

- トレイリングレフェリーは自分の周辺の範囲に責任を負う。
- リードレフェリーは、バックスケータリングで自分が担当するエンドゾーンの深い位置まで移動できる体勢をとり、OPMIに示されたポジションをとるようにする。
- リードレフェリーは全てのエンドゾーンをカバーするが、“プレイ”がエンドゾーンのある位置で展開されたら、アクションエリア（パックと選手がいる位置）をカバーすることに専念し、トレイリングレフェリーは自分の周辺の領域をカバーすることに専念する。（図14）

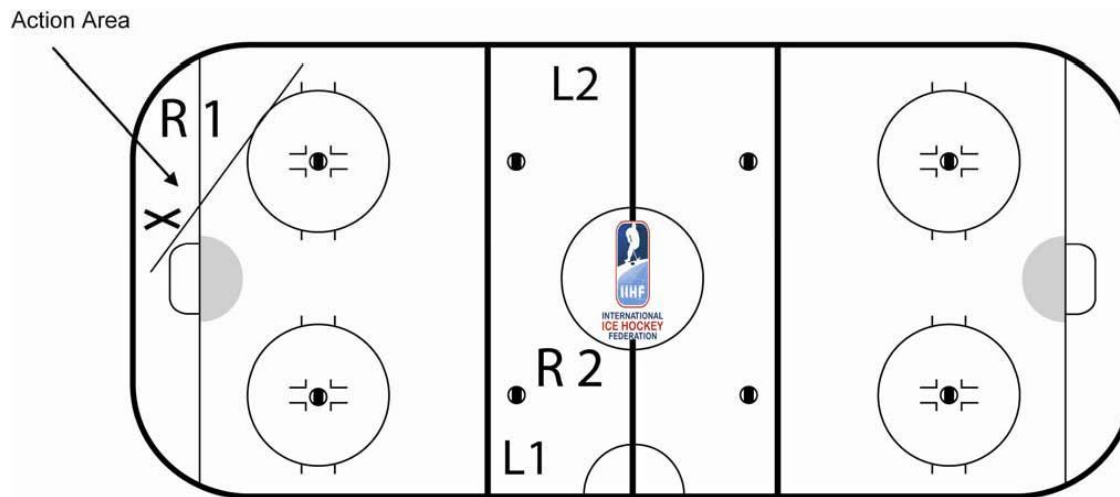


Figure 14

R1 = Lead Referee
R2 = Trailing Referee
L1 = Front Linesman
L2 = Back Linesman
X = Puck location

NOTE 1: The peripheral area and all other areas are covered by R2
NOTE 2: Action area varies from moment to moment depending on the location of the puck

- 2人のレフェリーがエンドゾーンを担当する時間は定められていない。2人のレフェリーは試合担当するエンドを交代しながらレフェリングをする。
- どちらかのレフェリーが長い時間同じエンドを担当するようなことがあったら、ゲームの中断時にエンドを交代してもよい。試合前に話し合っておくこと。
- また、トレイリングレフェリーがアクションエリアをしっかりと管理していることも重要である。ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリー(R2)は、リードレフェリー(R1)が担当しているエンドゾーンで何が起きているのかを常に管理していること。
- 試合の中断に際して、トレイリングレフェリーは、(必要であれば)ペナルティコールの補佐と観察のため、エンドゾーンの深い位置を観察、またはそこへ行くためにセンターアイスのフェイスオフサークルとブルーラインの間へと移動する。(図15)

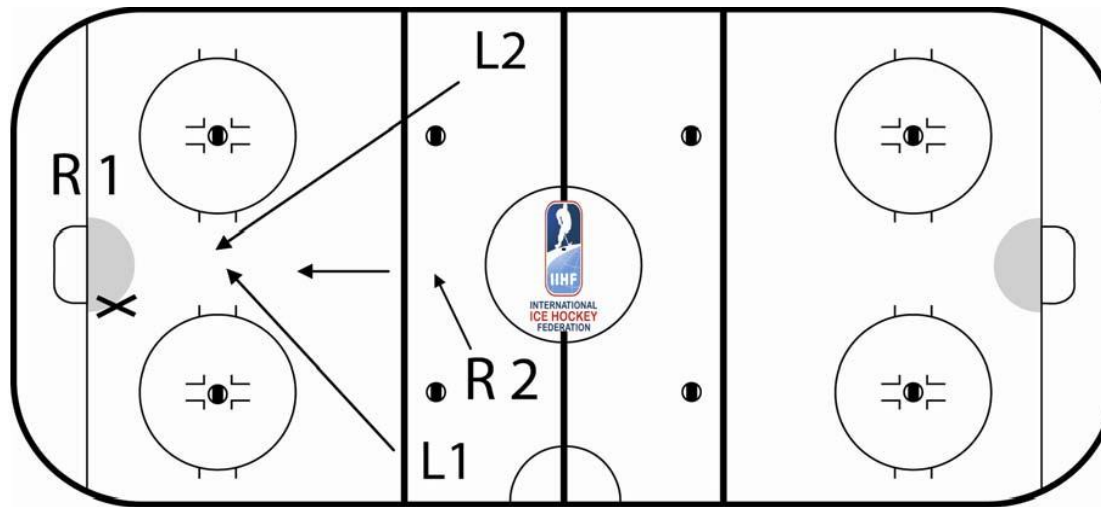


Figure 15

R1 = Lead Referee
R2 = Trailing Referee
L1 = Front Linesman
L2 = Back Linesman

X = puck location

- トレイリングレフェリーがエンドゾーンでのペナルティをコールしたが、リードレフェリーがトレイリングレフェリーが誰がパックに触ったかを確認しないうちにホイッスルを吹き試合を止めた場合は、トレイリングレフェリーもホイッスルを吹き自分もペナルティをコールしたことを示したほうがよい。
- ゴールキーパーがネットの前にスティックやグローブその他のものを置いてベンチへ戻り、代わりのチームメイトが氷上へ出たら、トレイリングレフェリーがペナルティを与える。
- ゴールキーパーがベンチへ戻るときには、それをコントロールするのはトレイリングレフェリーの責任である。
- 同様に、キーパーがネットを倒したりして離れた場合は、トレイリングレフェリーが試合を止めてペナルティを与える。
- エンドゾーンのリードレフェリーは、キーパーのマスクやヘルメットにパックが当たったときに、試合を止める判断をする役割を持つ。
- リードレフェリーがゴールを判定したら、2人のレフェリーはアシストが誰なのかを話し合う。
- ラインズマンもアシストを確認する。いずれの場合も話し合いは短時間で行うこと。

2 レフェリーの判断

- レフェリーの判断は、いろいろな状況に影響される、例えば
 - 位置
 - 視野
 - 試合の流れ
 - 違反行為
- 重要なことは、レフェリーが自分のジャッジと直感、資質に自信を持つことである。
- レフェリーが、ルール違反行為が起こったと100%確実に判断したらペナルティをコールすべきだが、もしも不確実な要素を感じたとき、もしくは自分のパートナーがそれを確認しジャッジをしたら、自分はペナルティをコールするべきではない。
- 注1 “ペナルティのコール”： もし片方のレフェリーが、もう片方のレフェリーによって妥当なコールができないと見られても、両方のレフェリーには妥当なコールをする権限がある。これは氷上のすべてのエリアにおいて的確な行為である

- 注2“ペナルティのコール” 判断基準は、審判間で困難な問題になることもあり得る。一人は「反則でない」といい、片方は「反則だ」と言うなど。氷上で二人のレフェリーの意見が異なるような問題を起こしてはいけない。両方のレフェリーには試合を正當に止める権限があり、違反行為があったらただちに一緒にペナルティを課すこと。
- 注3“ペナルティのコール”エンドゾーンでのフェイスオフの後、トレイリングレフェリーにとっては、自分の方へ（ブルーライン方向へ）向かってくる選手へのペナルティのコールは、アクションエリアに選手がいなくても容易であり正確なものとなる。
- 注4“ペナルティのコール”二人のレフェリーが、同じ、または違うペナルティをコールすることは当然である。
- チームワークを大切にすることで、このシステムは最良のものとなる。
- 自分のパートナーの裁定に対し、否定的な意見を言ったり、ジェスチャーで同意できないなどの態度を見せたり、批判をすることはしてはいけない。
- 片方のレフェリーがペナルティをコールし、もう片方のレフェリーが選手やコーチから質問をされたら、最も適切な返答は「彼は自分よりもよく見える位置で判断できた」である。レフェリーは「いい判断だった」とか「彼の判断をサポートする」などと言うことは避けること。レフェリーが二人氷上にいたとしても、常にラインズマンにはしっかりと状況を判断するように指導すること。
- レフェリークリーズ内での協議は、最小限の人数で行うことを心がけるが、必要なときには4人でレフェリークリーズ内で協議を行うこともある。

3 ペナルティーのコール



- リードレフェリーもトレイリングレフェリーも、自分のパートナーがどこにいたとしても、いつでも氷上のどこでもペナルティーをコールすることができる。これは、最も的確な場所と角度から試合を見ていたレフェリーに主導権がある。レフェリー間のジャッジには、意見の相違があってはならない。
- 二人のレフェリーが、同じ。または違うペナルティを、同じまたは違う選手に対して課する為にコールすることができる。2つのペナルティが別々の選手に対して課せられたときは、2つのペナルティのジェスチャーをそれぞれの選手を指し示して行うこと。ペナルティコールのために腕を上げた双方のレフェリーは、それが同じ選手に対してであっても、違う反則であっても（同じチームでも違うチームでも）、的確な判定をするために互いにしっかりとコミュニケーションをとること。この場合、ペナルティが起こったエンドにいるレフェリーが最初に反則のジェスチャーを示し、必要であればもう片方のレフェリーがその後にジェスチャーをする。この手順の目的は、反則をコールするのに十分な機会をあたえることにある。両方のレフェリーは課せられるペナルティが何なのかをお互いに理解していなければならない。また、必要であれば試合が中断しているときに短時間で話し合い、同じ選手に対しての反則なのか別々の選手なのかについてはっきりさせること。
- 反則が2つ起こった場合、まずリードレフェリーが自分がとった反則をジェスチャーで示し、トレイリングレフェリーがその後にジェスチャーをする。複数の反則が起こった場合は、2人のレフェリーは全ての反則についてしっかりと確認しあい、ペナルティタイムキーパーに連絡するのはどちらのレフェリーでもよい。
- スコアキーパーには、ジェスチャーをしたほうのレフェリーが報告する。
- 両方のレフェリーが同時に反則の合図をし、試合がニュートラルゾーンで止まったときは、ニュートラルゾーンにいるレフェリーが反則を報告する。
- エンドゾーンで試合が止まり、双方のレフェリーが合図をしたときはエンドゾーンにいるレフェリーが反則を報告する
- 両方のレフェリーがそれぞれ違う選手に反則を課したときは、それぞれが自分が課した反則について報告し、試合が中断したときにいたエンドに戻る。

- 注1 二人のレフェリーはそれぞれ、常に試合をよく観察していること、自分が見た違反行為についてしっかりと的確な判定をする権限を持ち、氷上においてそのことをアピールすること
- 注2 レフェリークリーズや氷上のどこかで審判団が話し合うときは、基本的に必要最低限の人数とし、4人全員が話し合うときはレフェリークリーズ内で行うこと。
- メジャーペナルティーや複数の反則の場合は、2人のレフェリーで短時間に話し合いを行い、全ての反則についてしっかりと把握されていることを確認し、リードレフェリーがスコアキーパーに 報告する。
- 一つ以上の反則がコールされたときは、2つ目の反則についてはOPMに示されたとおりにジャスチャーで示し、いかなる混乱を避けるためにも正しいジャスチャーを行うこと。
- 二人のレフェリーが一つの反則に対して腕を上げたとしても、一人のレフェリーが一つの違反行為に対して一つのジェスチャーで示す。しかしながら、別々の2人の選手にそれぞれ反則が課せられたときは、2人のジャスチャーで示される。二人のレフェリーが的確な判定をし、二人が続けてジャスチャーし反則を課すために、コミュニケーションをとることは必須である。
- 片方のレフェリーがペナルティコールのために腕を挙げ、さらにもう一人のレフェリーも腕を上げたら、試合の中断されるまで二人とも腕を上げたままにいること。試合中断後の反則のコールについては、IIHFルールを参照にすること。ルールブックに従い、2人のレフェリーと2人のラインズマンは、反則を課すことについての責任と権限を持つ、2人のレフェリー間のチームワークを示すためには、反則ではなかったときに「ウォッシュアウト」のジャスチャーをすることの危険性について熟知しておくこと。反則ではなかったときに、ウォッシュアウトのジェスチャーをしてはいけな。2人のレフェリーは、自分のパートナーがいつ、どんな場面で選手に警告を与えるかについて注意を払っておくこと。選手と言葉で会話をし、今選手がどのような状態なのかについて指導をすることも時には求められる。試合が続行しているときに「まだ反則ではない」とか「もう反則はしないこと」などの言葉については最新の注意を払わなければいけない。
- 反則ではないときに、声やジャスチャーでそれを示すことは避けること。氷上の選手やベンチからによる言葉による侮辱の反則については、そのエリアにいて、それをしっかりと確認できたレフェリー、ラインズマンのどちらからでもコールできる。ラインズマンはレフェリーにその事実を、腕をあげることなくレフェリーに報告する。

4 反則を科した後のレフェリーの位置

- エンドゾーンで起こった反則をニュートラルゾーンにいるレフェリーがコールしたら、そのレフェリーが反則について報告をする。そしてエンドゾーンのレフェリーとしてのポジションをとる。 エンドゾーンのレフェリーはニュートラルゾーンのレフェリーとしての位置に移動し、選手交代のコントロールをする。
- エンドゾーンのレフェリーが反則をコールしたときは、彼が反則をコールしエンドゾーンに戻る。
- ニュートラルゾーンのレフェリーはニュートラルゾーンに残り、選手の交代をコントロールする。
- 反則をコールした後、エンドゾーンのフェイスオフスポットを選択するときには、プレイヤーベンチの反対側にある方を選ぶ、こうすることによって反則を科したレフェリーはプレイヤーベンチに直面せずに反対側に位置することができる
- もし、直面してしまう場合には、ペナルティーをコールしたレフェリーは少し横にずれた所に位置する。

3. 手順について

1 試合中断時の選手交代の手順について

- エンドゾーンでのフェイスオフのときは、どちら側のサイドにいてもトレイリングレフェリーが選手交代のシグナルをする。選手交代のシグナルをするときは、特にプレイヤーベンチ側にいるときは、コーチから良く見えるようにボードから離れること。
- ニュートラルゾーンでのフェイスオフのときは、トレイリングレフェリー(R2)はプレイヤーズベンチ側にもいなくても、選手交代のコントロールを行うこと。センタースポットに向かって移動し、コーチに自分が良く見えるようにすること。選手交代はIIHFルール412条にしたがって手順を踏み行うこと(これはコマーシャルタイムのときにも適応される)(図16)
- ニュートラルゾーンにいるレフェリーは、全ての状況において選手の交代をコントロールする。

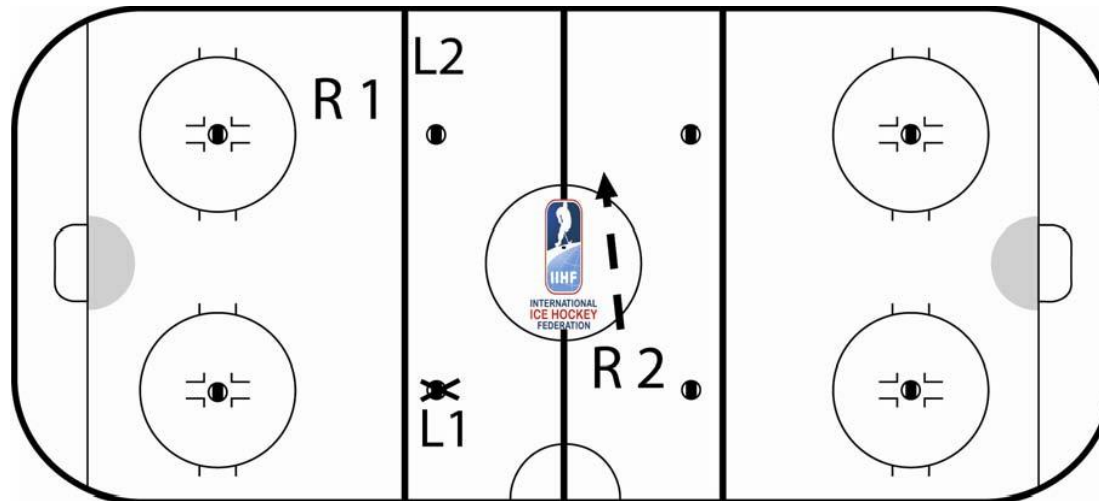


Figure 16

R1 = Lead Referee

R2 = Trailing Referee - moves out to control line change

L1 = Front Linesman - conducting the face-off

L2 = Back Linesman

X = puck

2 ビデオによる判定

- 片方のレフェリーがビデオによる試合の確認を要する場合は、その要求をしたレフェリーがビデオゴールジャッジに電話で連絡し確認を行う。もちろん、両方のレフェリー同士で話し合うことも行う。
- ビデオゴールジャッジとレフェリーが確認をしている間、片方のレフェリーは選手をしっかりと観察し、ビデオゴールジャッジと話し合っているレフェリーが選手から干渉を受けないようにする。
- ビデオゴールジャッジで確認するときは、レフェリーは氷上から出て、スコアキーパーズベンチの中まで入って電話をしてもよい。ビデオゴールジャッジとの確認が終わったら、レフェリーは ゴールなのかノーゴールかの最終判定をジャスチャーで示す。
- ビデオゴールジャッジと確認をしていないレフェリーは、どのような状況なのかについては 一切選手に話をしてはいけない。ルールに基づいて確認を行っているということだけは説明しても良い。
- ビデオゴールジャッジを要求するのは、その事象が起こったゾーンにいたレフェリーである。彼がビデオゴールジャッジと直接に確認を行い最終的な判定を下す
- ビデオゴールジャッジを要求するときは、2人のレフェリーは短時間で話し合い、ビデオゴール ジャッジから「不確定、結論が出ない」という返答の際に時間を確保する。
- もしもビデオゴールジャッジからの返答が「自分の位置からは決定的な判定を出せない」という 返答がきたら、ラインズマンを交えて可能だと考えられる状況を踏まえ、自分たちで結論を出す。
- ビデオゴールジャッジを要求したレフェリーが最終的な判断をしてシグナルしアナウンスさせること。
- もし選手がビデオレビューを要求したとしても、レフェリーは「チームからの要求でレビューは できない」ということを伝えること。

3 延長戦でのレフェリーの役割

- 延長戦になったときは、延長戦のピリオドの開始の手順や位置は、レギュラーピリオドの開始と同じである。

4 ゲームウイニングショットの際のレフェリーの役割

- 一人のレフェリーは、ショットが行われる側のゴールクリーズのチェックを行い、アリーナのスタッフにどうやって氷上を整備するかなどを伝える。
- 同じ(1人の)レフェリーが、双方のチームのコーチにどういう状況なのかを伝える
- もう片方のレフェリーは、キャプテンを呼びコイントスを行いどちらのチームが最初にショットを打つのかを決める
- レフェリー一人とラインズマン一人は、ゴールラインに位置をとり、3人制同様にもう一人のラインズマンはベンチ側に立つ
- ニュートラルゾーンのレフェリーはショットを打つ選手に指示を与え、正しい選手がショットを打つか、正しいオーダーでショットを打つ選手が出るのかをしっかりと確認し、エンドにいるレフェリーがホイッスルを吹くまで待つ。
- ゴールラインにいるレフェリーは、ゴールキーパーに指示を与え、適確な時間にホイッスルを吹き、
- 選手にショットを打たせ、ゴールかノーゴールかのジャスチャーをする。
- 選手がショットを打ち始めたら、ニュートラルゾーンのレフェリーはセンターアイスを横切るように、ミッドラインに沿ってブルーラインの2, 3M内側を移動し、選手やゴールキーパーの動きが良く見えるようにする

5 ベンチへの報告

- プレイヤーズベンチへ行き、コーチに説明をしなければならないと判断したら、実際に裁定を下したり判断をしたレフェリーが行って説明することが望ましい。
- しかしながら、両方のレフェリーが片方のベンチまで行ったり、一人のレフェリーが双方のベンチに行ったりということも考えられる。
- もしも、片方のレフェリーがチームへの説明に困難な状況が見受けられたら、もう一人のレフェリーがチームと話し合うようにすること。これは、チームに対し影響の少ない1人がベンチに行くことがよいこともある。

6 報告書の書き方

- 報告書を提出しなければならない反則が生じた場合、両方のレフェリーが報告書を書くこと。
- レフェリーゲームレポートの提出が求められた場合、4人の審判団全員がサインをすること。
- ただし、違う書式で提出しなければならないことについては、その反則について担当した審判が
- 別紙で提出すること
- ラインズマンも報告書を要求されることがある。これは他のオフィシャルシステムに準ずる。
- 報告書を委員会などに提出をする責任は2人のレフェリーにある。
- 2人のレフェリーは、委員会からの要求があったら会議に出席する必要がある。

7 口論や乱闘への対応

- レフェリーは乱闘へ対応することを想定し肉体的にも鍛えておくこと
- 乱闘の場合は、レフェリーは観察に徹し、ラインズマンはこれまでの経験に基づいて乱闘を制する。
- レフェリーの判断に基づいて可能な限り乱闘を止めるようにする。
- そのエンドゾーンを担当するレフェリーは、反則を与えることに責任を負う。また、もう片方のレフェリーも要求があれば反則の判定をサポートする。どのような状況でも話し合いは短時間で。
- エンドゾーンでの乱闘が起こっているとき、トレイリングレフェリーは状況をよく観察し、プレイヤーズベンチの動向をコントロールし乱闘に加わる選手が誰なのかをよく見ていること。位置はブルーラインに近いところにとり、エンドゾーンの深い位置までいくことは避ける。
- 複数の選手がかかわる乱闘のときは、トレイリングレフェリーはまず上記の責任をしっかりと果たすこと。そして、リードレフェリーが意見を求めてくることも考えられるので、乱闘の場面に近づき何が起きているのかをしっかりと把握すること。ただし、ブルーラインを横切ってすこしずつ近づくことはかまわないが、乱闘に巻き込まれることにはないようにすること。
- もしも口論やラフイングのような状況がエンドゾーンで起こり、ゴールキーパーにペナルティを科せられるようなとき、ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリーは、
- 氷上の選手の背番号をメモする
- ベンチからいかなる選手も離れてはいけないと指示する
- エンドゾーンでの口論が起こったら、試合中断時に、ニュートラルゾーンのトレイリングレフェリーはサークルのトップまで移動し、同時にポイントプレイヤーの動きをチェックすること。

- 以下は、乱闘をどう裁くかの手順を簡単にまとめたもの。



レフェリーの仕事

- 1 リードレフェリーが判定を主に担当する
- 2 トレイリングレフェリーは選手を乱闘から離れるようにコントロールする
- 3 乱闘をおさめたら、短時間で確認のために話し合いを行い、2人のレフェリーはかかわった全ての選手に的確な反則を与えることができるようにする
- 4 リードレフェリーが反則について報告を行う
- 5 また、リードレフェリーは両チームのキャプテンにどのような反則を誰に課したのかを説明する 責任がある
- 6 同時にトレイリングレフェリーは他の選手たちの動向をしっかりとコントロールする
- 7 両方のレフェリーはどんなペナルティが与えられるのかを周知する
- 8 次のフェイスオフをどこで行うかを確認する

ラインズマンの仕事

- 1 OPMにしたがって乱闘を制する
 - 2 乱闘に加わり反則を課せられる選手をペナルティベンチまで連れて行き、他の選手たちを氷上から引き上げさせる。
 - 3 両方のレフェリーがレフェリークリーズ内で話し合いをしているとき、ラインズマンは選手の動向をコントロールする
 - 4 もしもレフェリーからの要請があれば、ラインズマンとしての意見をレフェリーに伝える
- その他
 - 正しいペナルティーを科すことが目的である。

8 その他の手順について

- 両方のレフェリーは、ハンドパス、ハイスティック(パックに対する)パックアウトバーンズなどについてもコールをする。もしもレフェリーがこれらのコールについて見るができなかったらラインズマンがレフェリーに伝えるなどアシストすること。
- まずレフェリーがこれらのコールをするのだが、もしもレフェリーが見ていなかったときは、ラインズマンが的確なコールをする。ラインズマンにはこれまでと同じ権限がある。
- 選手がハイスティックでパックを扱い、レフェリーがハイスティックのジェスチャーをしたら、
 - 次に何が起こるかを見る
- — ハイスティックをしたチームの選手がパックに触ったら⇒試合を止める
- — 相手チームがパックに触ったら、⇒ ウォッシュアウトのジェスチャー
- (R1でもR2でも)これらの違反行為について最初にジェスチャーを示したレフェリーが、
- それについて最後まで責任を負う、⇒試合を止めるかウォッシュアウトのジェスチャー

- ハイステックでなければウォッシュアウトのジェスチャーは必要ない
- 適切であると考えられる場合は、トレイリングレフェリーは試合の再開を早めるためにどちらか、または両方のプレイヤーズベンチの対応に当たる。
- 両方のレフェリーがベンチへ行く場合は、二人とも同じ指示を双方のコーチに与えること
- ラインズマンがブルーライン上での判定ができないようなときは、まずもう一人のラインズマンが判定をできる状態にあるかを確認し、それでもできないときはレフェリーが判断をくだし試合を 止める。
- 両方のレフェリーはアクションエリア内における自分の責任だけに集中してはいけない
- 試合の動きによっては、レフェリーが二人とも同じサイドにいることもあり得るが、試合の動きを良く見て正しい位置に戻れるときにすぐに戻ることに。

9 レフェリーの負傷とラインズマンの役割

9-1 レフェリーの負傷

- もしもどちらか一人のレフェリーが試合実行不可能となった場合、3人制で試合を再開する。

9-2 ラインズマンの負傷

- もしもどちらかのラインズマンが試合続行不可能となったら、以下の手順で試合を行う

9-2-1

- 残ったラインズマンがセンターでのフェイスオフ以外の全てのフェイスオフを担当する
- エンドゾーンでのフェイスオフのときは、R2がブルーラインに戻るまで、またはもし試合の流れが変わって遠いほうのブルーラインにラインズマンに戻るまでブルーラインを管理する
- ニュートラルゾーンでのフェイスオフでは、ラインズマンに戻るまでレフェリーが一番近いブルーラインを管理する

9-2-2

- もしもラインズマンがブルーラインをカバーできない位置にいるときは、レフェリーが一番近いところのブルーラインを管理し、必要なときには試合を止める
- ディレイドオフサイドのときは、レフェリーが口頭でその旨を伝える。レフェリーはディレイドオフサイドのときは手を上げてはいけない。ディレイドオフサイドがまだ起きている間にラインズマンがラインまで来たら手を上げてラインを管理する。

9-2-3

- 残ったラインズマンがアイシングのコールをする

4. ラインズマンの手順とガイドライン

1 ラインズマンがしてもよいペナルティのコール

- これまでのルールに示されている権限に変更はない
- ルールブックに示されている権限を持つ

2 センターアイスで行われるフェイスオフの時の位置

- ラインズマンの位置は3人制の場合と同じである。
- 注 参照とされるポジショニングはガイドラインであるので、試合の流れの妨げにならない限り、位置を臨機応変に変えることもかまわない

3 転倒、または妨害されたレフェリーとラインズマンの役割

- もしもレフェリーが何らかの妨害にあってゴールラインまで来ることができないような場合は、ラインズマンはゴール付近でのゲームをカバーする権限がある
- ゴールが決まりそうな状況のときは4人のうち誰か一人はゴール付近にいること
- もしもリードレフェリーが転倒したりしたら、ラインズマンはまずトレイリングレフェリーがカバーできるのかを確認し、もしできそうならトレイリングレフェリーがエンドゾーンの深い位置まで行くようにする。トレイリングレフェリーもカバーできないようなとき、要請があればラインズマンがエンドゾーンの深いところまで行き試合を見る

最後に

審判団4人制の成功の鍵

- 会話
- チームワーク
- 自分の仲間を尊重すること
- 試合に対する誠実な姿勢